

山と博物館

第4巻

第12号

1959年12月25日



ホホジロガモ

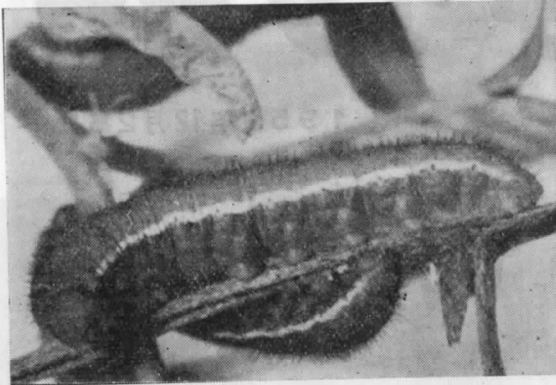
本種は潜水鴨類の中で、海棲を主とするため、内水面にみることは稀である。北岸よりの浅瀬に潜水して採餌していたので距離80mで撮った。野尻湖菅川地籍 500%望遠使用

(撮影 羽田健三氏)

大町山岳博物館

冬でもりする昆虫たち

倉 田 稔



冬になつても成長しているモンキチ ヨウの幼虫
(1月中旬)

エンマコオロギの鳴き声のとぎれる頃、北アルプスは、すっかり冬姿に衣替をしましょう。こんな頃遠く傾く夕日を浴びて、あたたまつた板壁や、障子窓にテントウムシやハエの仲間が沢山集まっているのを見かけることがあります。これ等の昆虫たちはいつたい冬をどのようにして過ごすのでしょうか。

昆虫の変態(生活様式)

昆虫類は一般に卵——幼虫——蛹——成虫(ハエやチヨウ)及び卵——幼虫——成虫(バッタやイナゴ)という変態をして一生を終ります。なぜこのような変態をするのでしょうか。この変態という現象は昆虫たちが昔からの長い生活を通して獲得して来た大きな生活手段であると考えられます。長い生活の歴史の中で昆虫たちは乾燥とか寒さとか暑さという生活しにくい環境に幾度となくめぐりあつて来たことでしよう。このような時その環境に適応して行かなければ生きることができないわけです。このようなことゝの繰かえしのある長い生活の中で昆虫達の生活の中に自然との闘いを通してそのような環境に適応する生活手段として食物を全然とらなくとも生きて行ける、卵とか蛹という形態のある生活様式が生みだされたのだと考えられます。このような長い間の生活の中における自然との闘の結果として、変態という大きな生活様式が生れ、今日もなおその生活様式が続けられているのだと見る事ができましよう。

冬越のさまざま

昆虫類の冬越しにはクマのように冬が近づくとなぐらを作つて冬眠してしまうものと、人間のように冬眠しないで冬でも生活を続けて行くものとの二通りがあります。アゲハチ ヨウやモンシロチ ヨウのように一年に3~4回も世代をくりかえして最後に蛹という形で冬を迎えるもの、エンマコウロギやカマキリのように卵で冬を迎

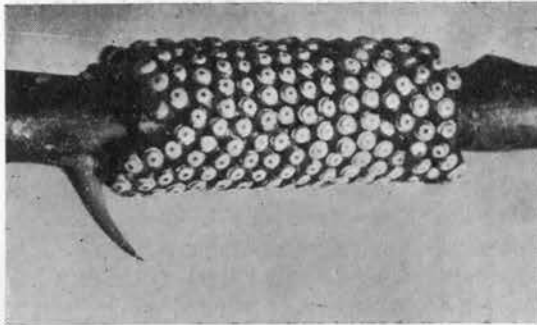
えるもの、イエバエやモンキチ ヨウ幼虫のように、冬になつても気温さえ上ればどンドン食物をとつて成長し、真冬にでも産卵、孵化、蛹化、羽化するもの、オオムラサキやゴマダラチ ヨウのように、冬が近づくと落葉の下にもぐり込んで冬越のための巣を作り、その中で冬眠してしまうものなどのように昆虫類の越冬方法は種々雑多である。中には多くの昆虫たちが見られなくなるが木枯の季節になつて始めて本格的な活動を開始するフユシクガのようなものもいます。

卵での冬越

悪い環境条件にたえ得る最も良い形態は卵の状態です。雑木林へ行つてみましょう。太いくりの木の幹には幼虫がシラガタロウと呼ばれるクスサンの白っぽい卵が50位多い時には200近くも一塊になつて産みつけられています。同じ幹にクリオオアブラムシの真黒い卵が無数に産みつけられているのも見られます。ミズナラの小枝の先には真珠のようなアカシジミの卵が、サワグルミの若枝の先には、ミヅイロオナガンジミの卵が2~3ヶかたまつて産みつけられています。又ノイバラの小枝には、オビカレハガの卵がぐるりと小枝をとりまいています。これらの卵はいつとも強い北風にあおられているので、それに耐え得るような強い殻につつまれています。北風の吹きあれる草原にはオオカマキリの卵が軟いフェルトに包まれています。このように土の中や軟いフェルトにつつまれて冬越しする卵の殻は、北風にさらされているクスサンやチヨウ類の卵に比べれば卵の殻は非常に軟くできています。

幼虫での冬越

雑木林の周辺にあるエノキの樹の根もとの落葉を一つ一つまくつて行くと、葉裏にしつかりしがみついている、オオムラサキやゴマダラチ ヨウの幼虫を見つけることができます。これらの幼虫は、落葉する頃に樹上から降り落葉の下にもぐり冬眠して越冬に入るのです。この時オオムラサキの幼虫は3令に、またゴマダラチ ヨウの幼虫は4令になつています。冬が近づく植木屋さんは庭先の大きな松の幹にむしろで腹まきを作ります。これは松の葉を喰い荒すマツケムシの冬越の巣なのです。2令から4令に成長したマツケムシは冬が近づく、冬越のための巣を探して松の幹をはいまわります。その時むしろの巣をみつけたものは、その一つのむしろに400~500匹位が入つております。植木屋さんはこのマツケムシの入つた巣を2月下旬頃の、最も寒いときはぎとつて焼いてしまうのです。マツケムシの退治はこのように虫の性質をうまく利用してやります。夏になやまされるドクガの幼虫も冬眠するとき退治します。モンキチ ヨウの食草のスズメノエンドウやベニシジミの食草スカンポは



ノイバラの茎に産みつけられたオビカレハガの卵

冬でも青々としているので、成虫は晩秋になっても産卵を続けています。産みつけられた卵は今にも雪が降りそうな時にも孵化し、幼虫は真冬の寒い朝など体中真白に凍りついていますが、日中になり気温が上つて来ると餌を求めています。雪の下にもまれてしまうとじつとしていて雪がとけるとまた生活をはじめます。このようなことを何回も何回も繰かえて2月下旬～3月下旬頃までに蛹となり、桜咲く季節には成虫となつてでるのです。私の調べた結果では寒い冬ですから卵から成虫になるまでに要する日数は夏の4～5倍はかかっています。土の中にはコメツキムシやコガネムシの幼虫類がいます。これらの幼虫は冬が近づく土中深くもぐり込んでしまいます。草原や土手につくられているトクリバチの巣の中では親虫の貯えてくれた青虫やクモを食いつくした幼虫がじつと春を待っています。カサカサに乾いたススキの枯葉の中ではギンイチモンジセセリの幼虫が北風にゆすられながら眠っています。

蛹での冬越

庭先の柿の木の梢に小さいスズメの卵のようなものを見かけることがあります。非常にかたくて石でたたかないと割れません。割つてみると中には真白な軟い蛹があります。これはイラガという蛾の蛹です。イラガの蛹はこのような固いよろいに守られて、北風にゆられているのです。カラタチの葉につくアゲハチョウ、ニンジンやセリにつくキアゲハ、葉の花につくモンシロチヨウなども蛹で冬越しします。モンシロチヨウは9月中旬頃にその年の最後の成虫が生まれ、産卵をします。幼虫はおそいものでも11月上旬には物陰や、落葉の下に入り糸をかけて蛹になります。成長が遅れてこの時期までに蛹になれない幼虫は寒さのために死んでしまいます。モンキチヨウの幼虫にくらべるとずいぶん違います。

これらの蛹は体の中に脂肪分をいつばいつめているので、卵と同じように相当の寒さや乾燥に耐えることができます。

成中での冬越

雑木林の中には朽木が沢山あります。そんな朽木の皮をはいでみましょう。ゴミムシやカメムシの仲間がたくさんでて来ます。また朽木を砕いて見ると地下鉄のように掘りめぐらされた孔の中からはアリの大集団をみつけることができます。これらのものはみな集団になつて冬

越します。これらの集団はみな10月下旬～11月上旬頃に冬越しを目的として集られた集団です。このような集団を私たちは越冬集団と呼んでいます。時にはこのようなアリの集団の中にハチやチヨウの集団が混つていることもあります。このような冬越に対してイエバエやアカタテハ、ソータテハなどは一匹一匹ばらばらで冬眠せず、雪の降っている最中でも気温さえ上がれば活動をしています。そして寒くなると家の軒や積葉などの陰に入つて休んでしまいます。イエバエは冬でも産卵し、幼虫も成長し、新しい親が生れて来ます。面白いことに成虫で冬越をするものはほとんど雌ばかりで雄はいません。オオイエバエは受精した雌だけが越冬します。冬にとれるチヨウ類もほとんど雌のみで雄はみかけられません。これらの雌はほとんど秋のうちに受精しているのです。冬のハエ一匹殺せば夏のハエ数万匹殺したことに匹敵するといわれるゆえんです。トンボの仲間の大部分は卵や幼虫で、小川や池の底で冬越をしますが、私たちがイトトンボといっている仲間のオツネントンボとホソミオツネントンボは成虫で越冬します。正月休みの暖かい日などに草原へ行つて見ると草むらの中にこれらの成虫をみつけることができます。成虫は体が細くて枯草のような色をしているので良くみないとみつきません。

冬に活動するフユシヤクガ

たくさんの昆虫の中には、昆虫がみられなくなる冬になつてはじめて成虫が現われるという変わった種類があります。真冬の雪のさんさんと降る夜中に電灯めがけて、白くすきとおつた弱々しい翅の蛾が花びらのようにまい込んで来る時があります。コタツにあたりながらこの蛾をながめていると「マツチ売の少女」の物語を思い出してしまいます。これはフユシヤクガという蛾で、一年に一回、晩秋から早春にわたつて出現するものです。大町附近では11月下旬頃から活動期に入っているようです。面白いことにこれらの蛾の雌は翅が退化していて、飛ぶことができないのです。だから雌は食樹の幹の上にじつと止つていて雄の訪問をうけるのです。電灯めがけて飛び込んで来るのはみんな雄というわけですが。地面が凍りつき、ひっそりと静まりかえつた雑木林の中で、このような昆虫にめぐりあえる楽しみは又格別なものです。このようにして見て行きますと昆虫たちは冬だといつて決して、冬ごもりばかりしてないことがわかります。

(学芸員補 第一中学校教諭)



軟いフェルトにつつまれたオオカマキリの卵塊

(3) フランスとイタリーの博物館

フランスとイタリーはどちらもラテン系民俗が中心な上に、古代文明の繁栄したその優れた伝承国であるだけに、何んといつても博物館は美術館と歴史博物館が中心となり、これにいわゆる名所旧蹟が無数に存在して旅行人々を過去の歴史に誘ってくれる。したがってという訳でもないが両国とも博物館には相当な力の入れようである——といつても結構観光資源としての面がすくなく利いている。

——フランスでは博物館庁とでもいう全国組織を中央に持つて全国博物館を一手に収めており、片やイタリーでは同じく文部省直営の体系の下に全国 約600の博物館を経営している。もちろん公私立の別はあるが、その全部に対して文部省派遣の博物館視学官が目を光らすといった次第である。この視学官が、予算もしくは、補助金を握っているのだからなかなか押しも利くという訳である。フランスでは博物館庁総裁が国立博物館総長——26の博物館長を兼ねる——という機構でその威力たるやたいしたものである。と書いてくると

なにやらいかめしい雰囲気か漂よってくるが事実はさにあらず、誠に楽しく美しい博物館ばかりである。ミレーの晩鐘に心をうたれモナ・リザの微笑に思い出し笑いをしながら歩きまわるルーブル博物館、ギメ博物館で十字軍遠征の折使われたという、例の貞操帯を探し求めた——君笑うことなかれ——人類学博物館にでている代表的日本人種という写真が明治の芸者さんだったり、何んとも楽しいものである。そういえばセーズ川の兩岸の散歩道には、1時間も抱擁しつづけている——誰だ見てる奴は——アベックが住みわけているし、何かこう明るく解放的でしかも他人に容赦しない寛容さが溢れている。従つて小生の博物館見学も客観的に研究すべき誠に固苦しいものはずなのが、とかく雰囲気に溶け込んで

楽しみながら展示を味わっているといつたものが多くなつてしまつた。だから、フランスの博物館の展示はみごとにたものだと今でも思っている。しかし冷静に考えると少才の利いた展示技術は多いが、どつしりした物になると、案外アメリカやオランダに太刀打ちできないところもある。そして国立でありながら、結構100フラン~200フランぐらゐの入館料をみなとつているという案外チャッカリした面ももっている。しかもバリーにあるユネスコ本部に向つては、好ましい博物館の解放策の一つは無料公開であるなどとぬけぬけと勧告している凶太さもある。ところで博物館と一口に言つて来たのは、実は歴史・美術関係のそれで自然科学系統は全然別個に組織され、例のジャルダン・デ・プラントにその本部があり博物館と呼んでいる。ここは上野の科学博物館をもう一際古くしたような展示の仕方でお話にならない。しかしこのジャルダン・デ・プラントはいろいろな施設の集合所、いわば総合博物館で、植物園、迷路庭園、温室、動物園、水族館、ビバリウムまで併せもっている。ビバリウ

ムというのは超小型動物園というところで、日本であるものでいえば、インセクタリウムである。トカゲがいたり、バッタがいたり、クモがいたり

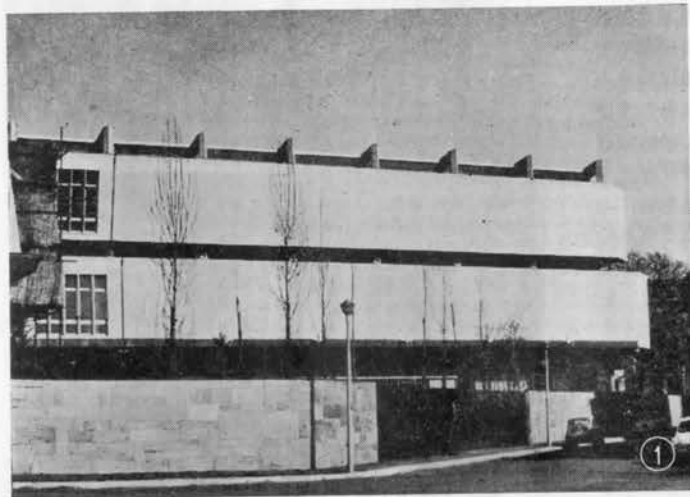
ヨーロッパの博物館

鶴田 総一郎

結構楽しんで見られる。こんなぐあだから冬の天気の良い日曜日なども大変な混雑である。といつてもほこりっぽい人の動きは全くない。親子づれで、朝からじつと日向ぼっこをしながら環境にとけ込んでいるといった様子である。それに鉄製の折たたみ椅子の立派なのが無数においてあつて自由に使っている、とこんなところを見て来ると、古くさい建物博物館が重々しい定着の下に作られた科学博物館などよりは、こういつた深さと広がりに変化に富む総合博物館群——小生の新語でいうと立体構造博物館——がぜひ欲しいなと思う。

さて同じラテン系でもイタリーの方はもつと観光策に徹底していて、およそ人が興味をもちそうなのは皆博物館と名付けて——チョット乱暴な言い方かな——堂々と

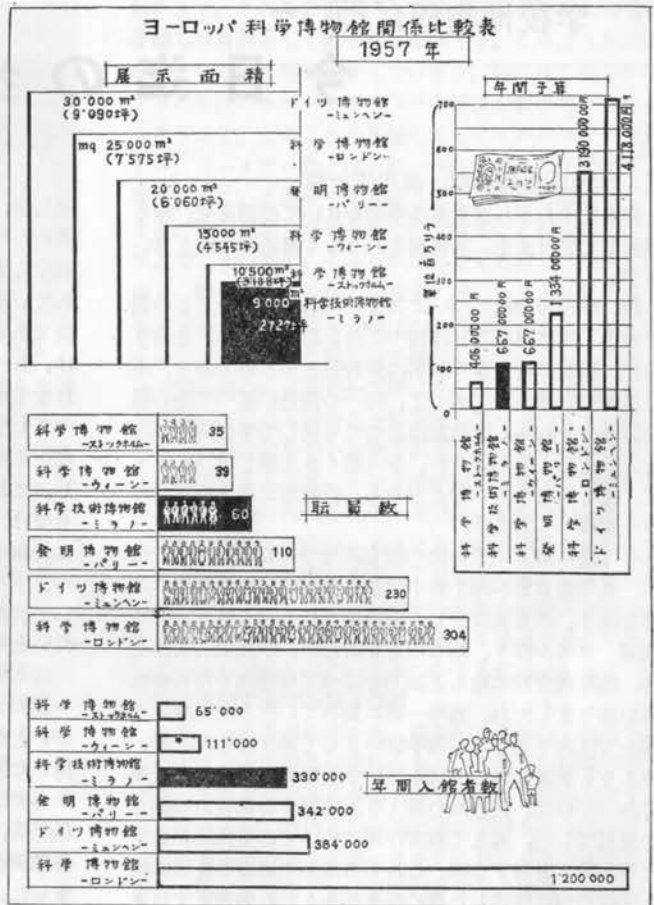
観光案内パンフレットに載せている。これにだまされて、唯のお寺の境内をみに行つたり、たつた一枚の絵が飾つてある博物館に200リラを払つたり、イタ公めといいたくなる時もある。しかしミラノのスフォルツェスコ城歴史美術博物館などは前者は展示、後者は名器の所蔵とその展示ケースの見事さで、今までどこにも見出し得なかつたものを持つていた。それにレオナルド・ダ・ヴィンチ科学産業博物館などは1953年にできただけに各国の名だたる科学博物館のいいところをよせあつめたような良さを持つている。この館はなかなか宣伝も上手らしく、予算獲得には別図のような各国科学博物館対比表を出して、いかに目的が能率的にやつているかを示している。それで能率の割に予算が少ないからもつと出せと



やる寸法だろうとこの資料を貰って微笑したものである。だい部話が脱線し、同時に既述の表がヨーロッパの科学博物館のまとめみたいになつたところでヨーロッパの博物館と題する見聞記を終りたい。(国立自然教育園次長)



① トリノに建設中(1959.4現在)の近代美術館
② ミラノの市立古楽器博物館の展示ケース曲面ガラスのすばらしいもの、照明は蛍光灯で斜上方を照している

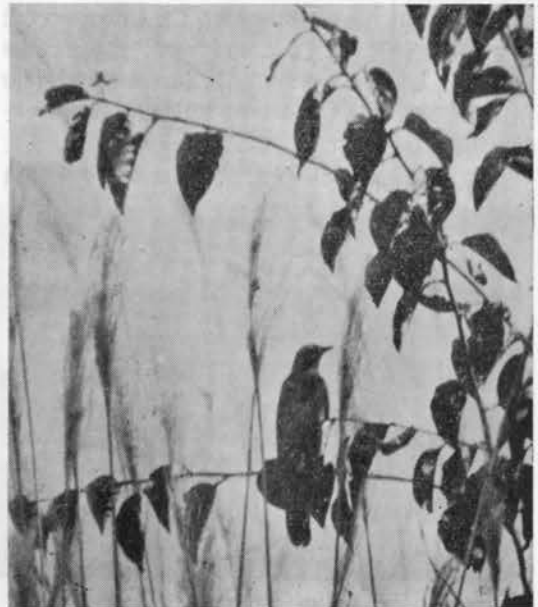


ツグミ

長 沢 修 介

冬の日射は弱く、昨夜の霜をとかし得ないで洗むことが多い。そんなわずかに溶けた田圃や麦畑によくツグミの姿を見る。こちらが近づく「ツツ、ツツ」と滑るように入んで行き、時々とまつてこちらの様子をうかがう。そして一定の間隔をおいて遠ざかつて行く、やがて麦畑のはじまで来ると「クワッ、クワッ」と一声ないで枯れ落ちた雑木林へ飛び込んで行く。ツグミの持つ情緒は群でいるときよりも、このように単独でいる時の方があつた。ツグミは冬鳥の代表的なもので当地への渡来は10月下旬頃から11月初旬頃で渡りの経路はシベリヤに繁殖し、北海道通過と、日本海横断と二つある。かつて北アルプスの2000メートル位のところで10月中旬に渡来したばかりの大群に会つた。その時はムシカリやガマズミの実を盛んに食べていた。ツグミは赤い実が好物のようでノイバラ、ツルウメモドキ、カキ、ソヨゴ、ニシキギ、マンリョウ、ツリンドウ等赤い実のものを良く食べる。又ツグミはカスミ網論争で業者から新聞紙上、果は国会

までもこの論争に巻込まれ世間をさわがせた鳥である。



学校博物館について

今日迄の歩み

宮 田 嘉 文

大町山岳博物館 海川庄一様

御多忙中わざわざ貴重な時間をさいての御意見、深く感謝して居ります。其後御変わりなく御活躍の事と思えます。

扱、学校博物館について其後の経過を知らせよとの御下命？ 実は内心これは弱つたなと思いました。と云うのは、当校に於ける呼び名は資料室と云うのであり、それに始めたばかりであつて、何一つ満足に整つてない現在、多少それらしき活動はあつても果して学校博物館などと云えたものかどうか。少々恐ろさを感じて居ります。兎も角も小生の考え方や、資料室に至る今日迄の歩みを書いて見ます。

今は既に懐しい思い出の如くになってしまいました。が、五年前貴兄が南小谷小学校在職当時、自然利用の必要を説き、教育施設としての環境を作るべく自ら植物の検索、ラベル作り、貼布などを行ない、学校周辺及び川内、池原両分校に殆んど独力を以つて植物園を作らせた事がありましたね。当時一緒に勤めていた小生もほんの僅かではありましたが御手伝いさせて頂きました。が、何よりも教職に奉じて間もない小生にとって大きな収穫であつたのは、大自然の偉大さと内蔵する教育力の強さの発見でした。加えて教育作用に於いて直接体験が最も重要な働きを有する事、これらの事から児童の生活経験と学習内容に即応した真に生き生きとした教育とすべき教育施設、環境の必要を痛感させられたのです。其後間もなく現在の中土に転任、早速土谷分校の裏山に植物園を設け、当地の昆虫相の調査に着手しました。この中植物園については貴兄の御指導を多としたものであつて記憶も新しい事と思ひます。こうして三年、遅々とした歩みではありましたが仕事の暇を見て調査研究を続け、四年目の或る時、ふとした事で中土村誌のある事を知りそれを見る機会を得ました。実に立派なものでした。大正の初期に脱稿完成したもので、九年の歳月と、学校職員

は勿論、役場吏員等多くの人々が参加して最後に手筆で書かれたものです。その時非常に残念に思つたのは、其後全く筆が加えられていない事及び冊子としてまとめられているだけで少しも陽の目を見る機会が無く埋もれた儘であると云う事でした。当時の人々の労苦を思うにつけ、且つ収められた貴重な資料を見るにつけ、何とかこれを生かせないものかと考えました。大分長たらしくなつてしまいましたがこれが資料室への動機でもあり、原型ともなつたものです。そこで先ず着手したのが村誌写し。これは禁帯出であつたのですが無理に御願ひして借り受け、当時一緒であつた真木分校の堀尾貫文先生と共に仕事の合間を見て約二ヶ月、本年三月まで掛つて上、中、下三巻を全部写し取りました。これは、これに基づいて資料を集める為と、出来得れば筆を加えて再編纂したいと考えた為です。

迎えて昭和34年度、学校内の組織も変わり小生も本校へ移転となりました。これは資料室実現にとつて非常な幸いとなりました。と云うのは、早速資料室設置の話を出した所、校長以下多くの同僚の理解と協力が得られたからです。そこで直ちに校長を長とする以下自然科学関係三名、人文、社会科学で三名、都合七名より成る委員会兼調査会を組織し、目的を確認し、年間計画を立案しました。その大要は、「山間僻地とも云うべき本村は教育的施設、環境に恵まれて居らずそれを満足すべく、また、教育の営みは先ず地域社会に於ける身近な文化の獲得から始まり、更にはその向上発展を期すべく、少なくともこの地域に於ける自然や自然現象、文化的遺産を教育的に用意し、教育の効果を大ならしめる事は極めて重要な事である。その為に先ず、過去に於いて村誌の如き立派な業績があるのでこれを基とし、この地に於ける自然人文社会すべてに亘る資料を解明若しくは調査蒐集し、出来得れば村誌再編纂にまで至る。その活動は、勿論委員が中心となるものではあるが全職員にこの計画を知らせ、理解と協力を求めると共に出来るだけ児童生徒の学習活動と関連を持たせて行なう様にする。本年はその最初の年であるから満足な結果は期待出来ず、専ら資料の調査活動のみで終る事と思われるがその骨子だけは作りたい。そして明年度からは、全職員参加の許に学校全体の仕事として計画を組み、予算も確保してしつかり押し進める。これは、いわゆる物好きな一部の連中の仕事とせず永続性のある教育活動とする為です。この様なわけで委員はそれぞれの分野に於けるテーマを決定し、早速実行に移りました。所が実際には小さな学校の性質上、校務、雑務、行事等に追われ、又児童生徒の活動も殆んど取り入れられず思う様な進行を見ないで唯焦るばかりでした。それに中途からの計画と云う事で予算化も



昆虫採集 小林 正

されず、唯、来年度学級増に伴う改築と云う事で旧体操場が仕切られた際、その中の一室を資料展示及び保存室として充て、頂き、その他植物台紙等ごく僅かしか認めて貰えず苦しい進行でした。然し、何は兎もあれ、その名も資料室として僅かではあるが陳列台も設け、一室を確保出来た事は我々にとって非常に喜ばしい事でした。文化祭の時期を迎え、この機に今迄蒐集や研究を進めて来たものを一応整理して発表して見よう、と委員会で決め、11月1日から3日間、村の文化祭に合わせて展示しました。その内容は動植物、地質の概要と昆虫標本約100種、岩石鉱物標本約50種、中土の沿革史年表、他に校内の理科器具の展示などでした。誠にさゝやかなと云うよりもはつきりした位なものでもありましたが、然しこれとても、貴兄始め貴館職員、信大地質学教室の野村哲氏、本村の松沢周也氏等、各方面からの御指導や御意好により漸く展示の運びに至った様な次第なんです。それ以後は期末を迎え行事や校務の関係で殆んど進展して居りませんので、以上が本日迄の概要です。

こうして一応整理して見ると資料や計画の不備不足が目立ち、又調査途上に於いても多くの問題が生じて来ました。近く催される委員会に於いてそれらの問題点を論議し、今後の方針を打ち立てる予定であります。これに依つてはつきりした方向が決められると思われませんが、その主な問題点は大体以下の様です。

- 資料の調査蒐集活動と児童生徒の学習活動との関連をもつと密接にするにはどうしたらよいか。
- 蒐集された資料とカリキュラムとの関連（これにはカリキュラムから選択されたもののみ蒐集した方が良い。
- △ 蒐集した資料をカリキュラムに添って選択、用意する。の二つの意見があり、いわば教材に主を置くか、

ウ ラ ジ ロ

中村武久

正月になると家々に門松を立て新年を祝うのは云うまでもないが、さて年の始めにこの松を使うのはどんなことからか、といつても特に古い民族的な研究をしてみたことがないので、確たることは解らないが、おそらく松は昔から、千歳を契るともまた千年の齢を保つ、といわれるぐらいだから、その四季を通じて雪の中でも緑濃い葉をもつ植物であることから、芽出たいものとして使われるようになったに違いない。

この松と同様、正月によく使われるウラジロ、確か我々の小学校時代の国語の中に「お正月こい、早くこい、山のウラジロもつてこい……」という詩があつたが、正月に松がつきものと同様ウラジロも亦忘れることができない。ここ大町でも多聞にもれず正月にウラジロを使うようだ。成る程ウラジロも、その葉の裏が神聖な色、白で然も松同様四季を通じて色も変らず青々としている。こんな点神聖、不老長寿、家族長久の表徴として成る程と納得できるが、不思議なことにこのシダは、実は暖地



八方屋根研究登山

それとも郷土室に置くかと云う問題と云えましょう。

- 展示方法の再考（廊下が狭い上に暗く全く使えず、勿論他に部屋は望めない）と保存整理について。
- 本年度中にも全職員参加のもとに学校全体の仕事として行きたいが、具体的にどのような組織と活動形態をとつたらよいか。
- 施設、資料の充実を計る為予算の獲得をする。

雑然と書き連ねてしまいましたが、貴兄の御意見通り日常の教育活動の中に生きた資料室として教育に資すべく今後共努力を惜しまずやつて行きたいと思つています。幸い貴兄始め貴館と絶えず連絡がとれ、御指導を直接仰ぐ事が出来ますので非常に心強く思つて居ります。いづれ移動博物館の形で資料の借用や調査の依頼等いろいろあると思いますが今後共宜しく御願います。

(山博調査員 中土小教諭)

のもので寒い信州にはまず見たくても見られぬものである。ちなみにこのシダの分布をみると、暖地の九州、四国はもちろんであるが、本州では表日本、裏日本共やや沿岸的に北上し、表日本では福島県まで、裏日本では新潟県までがその分布である。しかし福島県や新潟県のように北の方では極めて稀なもので、土地の人が正月の飾りに使うなど及びもつかない。

斯かることから、寒い地方で正月にウラジロを使うという風習は、その土地の祖先が、その土地で得た風習ではなく、少なくとも暖い地方から伝わってきたか、或いはかつての祖先が南の方の人間であつたかの何れかである。

とも角も葉の裏が白く、質もやや剛く、そして細かに切れた葉が整然と並んでいるこのウラジロは、モロミキの俗名があり、二又する葉形は夫婦差向いの象徴であつたかも知れぬし、また地方によつてはこのウラジロをシダ（齒染）と呼んでいるが、これはヨワイノエダと読むのだそうであるから、矢張り長寿の象徴でもあろう。

正月のウラジロにちなんで、ただ正月をお芽出たく過すばかりでなく、我々の祖先がもつて来たこのウラジロの由来を考えるのもまた一興だろう。(山博学芸員)

北信越博物館ブロック会議にて

古 川 潔

九州長崎市で開かれた、本年度全国博物館大会で、加盟博物館の都道府県ブロック別組織問題が検討された。新たに全国を10ブロックに別け長野、新潟、富山、石川、福井の5県は北信越ブロック、新潟県からは勝谷(積雲科学)、川上(長岡市立科学)両氏が全国博物館協会理事に選ばれており、ブロック内ではお二人ということで新潟県が第一回結成大会準備を引き受けて貰い、本年度は新潟県、用意は金井氏(直江津水族博物館長)ということを出発、創立大会は12月11日、日本海の見える直江津市の駅前いかや旅館ホールで開かれた。初冬で肌寒い日だが、どうした調子かこの日はあたたかく春のような気温、会場には既に直江津市教育委員会の白井、水族博物館の久能両氏が接待役、又主催者側の金井館長がデンと控え応接に活躍されていた。列車の到着ごとに参加者も逐次ふえ、1時の定刻には5県内10館長が集まる。

会議は時間正確に開会、地元直江津市は同日予算市会が始まり、市長、教育長の列席もなく、心持ちいささか淋しい。

金井館長の挨拶、同氏が座長、勝谷理事が全国大会の模様、ブロック別組織の方針その他の経過報告、議事は「北信越に於ける博物館の振興について」から始まった。各地館長それぞれ現地の報告に併せ国、県、市は博物館に対し極めて冷胆、予算、補助金は公民館に比較し少額だと実例をあげて説明強調する。結論的にはブロック組織を強化、難問題を打開しようと一決、この外現行博物館法の問題国庫助成金、学芸員の身分保証など当面問題をとりあげ意見の交換を行なった。大要は

(1) 国庫補助金の交付基準は博物館の施設書を対象にしているが、これを事業運営各方面まで拡大増額すること、又補助申請手続のはんさ、補助金監査の厳格さなど改めること。

(2) 博物館学芸員は国家試験による厳選さであるが、身分保証はこれに反しなんにもない。身分保証と教育各方面との人事交流により地方博物館勤務学芸員の素質向上につとめること。

(3) 現行博物館法は地方博物館を対象にしているが将来は国立を含めた一丸のものに改める事など申合せた。

反省事項は、今まで調査研究の学究面が多く対社会的活動が忘れられていた。次で「北信越博物館ブロックの結成方」に移り、協議の結果、名称は北信越博物館協議会、会則は追って定める。会長1名、副会長2名、幹事5名(各県の博物館協会評議員が兼任)事務所は会長就任者の所在地。全国博物館協会の理事評議員の選出、勝谷理事から協会の方針はなるべく再選をさけるようにとの注文があつたと説明、選挙に移った。投票はとりやめ各県一名宛の選考委員をあげ、別室で委員会を開き慎重慎議した。評議員 堀(福井) 金井(新潟) 古川(長野) 菊地(新潟佐渡) 九里(富山) の5氏理事 川上(新潟再) 下川(長野新) 両氏

明年度大会は富山県、会期は陽春5月上旬、学芸員参加も問題になつたが一応館長会と切りはなし研修会で開催すること。

かくて会議は日没の5時まで続いたが、あとに計画される懇親会に希望をつなぎ閉会、直に別室に設けられた日本式による宴会へ移つた。さすがわ海の国、生イカのさしみ、エビ小タイなどいづれも新鮮な肴が用意され、しかも同市教育委員会勤務の諸嬢のお酌とあつて会員はいづれもよき気分になつた。長野県ならとかく問題になりそうな諸嬢のお酌に対し彼女等は(遠来のお客さまへこの位のおもてなしなんでもない)と割り切り、ほのぼのした気持は参加会員全部が感じとつたことだろう。

北信越博物館協議会の会長は勝谷(積雲科学) 副伊藤(北方文化) 堀(福井郷土)の両氏

冬 山 に い ど む

大町山の会で計画

○ 舟窪尾根 厳冬期越年登山を計画し、来る12月29日より1月3日の間に隊員11名が参加して行なわれる。去る12月20日、燃料など一部の「荷上げ」が行なわれた。

○ 鹿島槍天狗尾根 厳冬期の1月14日より21日までの一週間、極地法によつて登頂する計画で隊員17名が参加して行なわれる。トレーニングには舟窪・鹿島隊19名が参加して去る12月12・13日と行なわれ、12月20日には食糧・燃料などの「荷上げ」が行なわれた。

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料170円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

〔編集後記〕

○ イノシシ年とも別れをつけて来年1960年はネズミの年、北アルプスも冬の衣をまとい、山麓では寒風が身を切る、山岳会では冬山、スキーシーズンを迎えて、準備に忙しい今日この頃「山と博物館」も4巻12号を数えました。皆様のご批判、ご援助により、更に一段と発展させて行きたいと努力いたしております。みなさまのご批判などお聞かせ願いますようお願いいたします。

○ ヨーロッパの博物館は今回で終わりました。お忙しいところ玉稿を賜りました鶴田伝一郎先生に感謝いたします。

山と博物館 第4巻第12号 1959年12月25日発行
発行所 長野県大町市 TEL(大町) 211
大町山岳博物館
印刷所 長野市岡田町 176
第一法規出版株式会社